

聖書: ヨシュア記 22 章

説教題: 主が私たちの中におられる

日 時: 2010 年 9 月 26 日

今日の 22 章でヨシュアは、ルベン、ガド、マナセの半部族を呼び寄せ、彼らの相続地に戻って行って良い、と言います。これら二部族半の人々は、ヨルダン川の東側に割り当て地を持った人々です。彼らはカナンへの地に入る前に、家畜を飼うのに適している東側の地を相続地として受け取ることをモーセに願い出しました。モーセはその願いを条件付きで受け入れていました。その条件とは、彼らも他の部族と一緒にヨルダン川西側の戦いに参戦すること、その先頭に立って戦うこと。そして無事、他の部族が西側に割り当て地を得た後、彼らは東側の地に戻って来ることができる、ということでした。ルベン、ガド、マナセの半部族はその約束に忠実に従って来ました。そしてついにこの時、自分たちの町に帰って良いとの許可が彼らに降りたのです。ヨシュアは彼らの労をねぎらい、感謝の言葉を述べます。8 節では、多くの分捕りものを持って帰りなさい！と言います。また彼らに勧めることも忘れません。5 節でヨシュアは言います。「ただ主のしもべモーセが、あなたがたに命じた命令と律法をよく守り行ない、あなたがたの神、主を愛し、そのすべての道に歩み、その命令を守って、主にすがり、心を尽くし、精神を尽くして、主に仕えなさい。」

こうしてルベン、ガド、マナセの半部族は自分たちの相続地へと送り出されます。ところがこの二部族半の人々は、ヨルダン川を渡ろうとするところまで来て、そこに一つの祭壇を築きます。それは大きくて、遠くからも見える祭壇でした。これが大問題となります。ヨルダン川西側のイスラエル人は、このニュースを聞いて激しいショックを受けます。これはとても信じられない。なぜなら主は申命記 12 章 5～6 節で、主が定めた場所でのみ、いけにえをささげるべきことを命じて来られたからです。その場所はヨルダン川西側のエフライムの相続地にあるシロという場所に決定していました。なのに、ルベン、ガド、マナセの半部族は、それとは別に祭壇を築いた。一体彼らは何を考えているのか。主の御言葉にそむいて、自分勝手な礼拝をささげようとしているのか。彼らはシロに集まって、二部族半の人々といくさをするために準備をします。そしてまず祭司ピネハスと各部族からの代表者 10 名を送って、二部族半の人たちに問いました。15～16 節：「彼らはギルアデの地のルベン族、ガド族、およびマナセの半部族のところに行き、彼らに告げて言った。『主の全会衆はこう言っている。「この不信の罪は何か。あなたがたはきょう、主に従うことをやめて、イスラエルの神に不信の罪を犯し、自分のために祭壇を築いて、きょう、主に反逆している。』」

彼らは人間的にはできればこのようなことはしたくなかったでしょう。たった今、彼らは二部族半の人々に感謝して、感動の内に送り出したばかりです。そんな人々に「この不信の罪は何か」などと問いたくはない。しかし彼らはこのことを控えませんでした。彼らは二つの過去の反逆事件に触れて警告します。一つは 17 節にありますようにペオルで犯した不義です。民数記 25 章に記されていますが、イスラエルはかつて約束の地に入る直前で、モアブの女たちとみだらなことをし始めたことがありました。そして次第にその女たちの神々、バアル・ペオルを慕うようになり、その偶像礼拝のために 24,000 人に神罰が下ったことがありました。もう一つは 20 節にありますようにアカンの事件です。ヨシュア記 9 章で見た通り、アカンは聖絶のものの中から、金、銀、外套などを自分のために盗み隠す罪を犯しました。その反逆のゆえにイスラエルはアイとの戦いに敗れ、36 人の犠牲者を出してしま

いました。

このようにして詰め寄るヨルダン川西側のイスラエル人の姿に示されていることは何でしょうか。それは主を畏れて、御前に忠実に歩むことに対する真剣さです。彼らはヨルダン川東側の部族が主に背いて勝手に祭壇を築いたって、オレたちの知ったことではない、とは考えませんでした。彼らは兄弟であるルベン、ガド、マナセの半部族の歩み方にも注意と関心を払いました。そしてもし東側の部族が正しい道を踏み外しているなら、それを放っておくことはできないと考えた。彼らと自分たちは一体であるため、彼らが罪を犯すなら、それは自分たちの上にも災いをもたらします。もちろん彼らは単に自分たちが災いを受けたくないから、という理由によってのみ、東側の人々に勧告したのではないでしょう。彼らは主に対する忠実な歩みこそ、自分たちのなすべき分ととらえていました。それが自分たちに恵み深く約束を成就して下さった主に対するふさわしい唯一の応答であると考えました。ですから、そうではない歩みをしているように思われたルベン、ガド、マナセの半部族に、このように威嚇を持って迫ったのです。

しかし主に対して真実であろうとする熱心さを抱いていたのは、ヨルダン川西側の人々ばかりではありませんでした。21 節からのルベン、ガド、マナセの半部族の答えを見て行くと、彼らもまた主に忠実であろうとする真剣な願いと祈りを持っていたことが分かります。なぜ彼らはヨルダン川のほとりに、別の祭壇を築いたのでしょうか。彼らの説明によると、彼らはヨルダン川を渡る時に、その川が自分たちと西側の人々を隔てる大きな溝となるように感じたのです。そしてカナンのに住むイスラエル人が正統的なイスラエル人であり、東側に住む自分たちはそうでないと将来見なされるかもしれないという危惧を抱いた。彼ら自身、その川を渡ろうとした時、まるでイスラエルの外に出て行くような感覚を覚えたのでしょう。その心配が将来に現実となって、自分たちの部族の神礼拝が妨げられるかもしれない。その時にこの祭壇が、自分たちも西側のイスラエル人と同じ神を礼拝する民であることをあかししてくれる、と彼らは考えた。彼らはこの祭壇でいけにえをささげようとは毛頭思っていない、と言います。これは証拠となるための祭壇であり、28 節では「型」と言われています。すなわちレプリカということです。このように東側の部族を突き動かしていた思いは、自分たちはいつまでも主を恐れる生活をしたい、というものでした。また自分たちの世代ばかりではなく、後の世代、孫のそのさらに孫の世代の祝福も考えて、そのために今自分たちにできることをしようと彼らは考えたのです。

こうして浮かび上がって来たことは、どちらの人々も主に忠実に歩むことを真剣に願い求めていた、ということです。危うくいくさが勃発しそうな状況の中で、かえって浮き彫りになったのは、どちらも主を愛し、主に忠実に応答して歩むことを真剣に願っていた、ということ。この点における一致が、後の望ましい一致と平和を彼らにもたらす基礎となって行きます。

しかしこの「主に対する熱心」だけでは、望ましい結果は得られなかったでしょう。今日の章におけるイスラエル人の姿に見られるもう一つの特徴は何でしょうか。それは互いに対する愛ではないでしょうか。西側のイスラエル人は東側の兄弟たちの行動に愛の関心を注ぎ続けたから、この行動に出たと言えます。特に注目すべきは 19 節です。そこで彼らは東側の部族にこう言いました。「もしもあなたがたの所有地がきよくないのなら、主の幕屋の立つ主の所有地に渡って来て、私たちの間に所有地を得なさい。私たちの神、主の祭壇のほか、自分たちのために祭壇を築いて、主に反逆してはならない。また私たちに反逆してはならない。」 「あなたがたの所有地がきよくないのなら」とは「あ

なたがたの場所が主を礼拝するのに適していないと言うのなら」という意味だと思われませんが、「それならシロの祭壇から離れたところに住まないで、もっと近い、私たちのところに来て住みなさい。そのための場所を差し出しましょう。」と彼らは言っています。東側の人々に住む場所を与えるとは、当然自分たちの相続地を減らすということに他なりません。彼らの中にはかつて自分たちの割り当て地が少ない、と文句を言った部族もありました。しかし彼らは兄弟たちに罪の道を行かせるよりは、自分たちができることを何でもしよう、たとえどんな犠牲を払うことになっても！という態度を示したのです。これが相手の心を動かさずにいるはずがありません。この愛の姿に接して、ルベン・ガド・マナセの半部族も、過剰に自己防衛することなく、心柔らかくして自分たちの思いを率直に述べることができたのでしょう。そして互いに理解し合い、お互いの思いを尊重し合うことができたのでしょう。

こうして最後はハッピーエンドへと導かれます。祭司ピネハスはすべてを了解して、31節で「きょう、私たちは主が私たちの中におられることを知った。」と言います。そしてこのことをカナンの地に住むイスラエル人のところに持ち帰って報告します。するとイスラエル人もこれに満足し、神をほめたたえた、と33節に記されています。また最後の34節にも東側のルベン族とガド族は主の導きを振り返って、その祭壇を「まことにこれは、私たちの中で、主が神である証拠だ」と呼び、主に栄光を帰したことが記されています。

主が与えて下さる救いとは、単に神と私との間の平和だけでなく、主によって救われた者同士の平和にも現されるものです。私たちはただ一人で救われるのではなく、救われた民の集まり、その共同体の交わりという祝福の中に導かれるのです。このヨシュア記でも、単に神との関係ばかりでなく、イスラエルの一体性ということも大きな関心を持って語られて来ました。主の救いは、そのような見える神の民の一致と平和にも現わされて行かなければならないのです。

この神の民の一致と平和のために必要とされることは何でしょうか。第一に大切なことは、主の真理に妥協しないことです。言い換えるなら主に忠実である姿勢を曲げないことです。これをいい加減にして、まあまあみんなで仲良くやりましょうというのがキリスト教ではありません。イスラエルは今日の章で互いへの愛と配慮を持ちながらも、もしあなたたちが主の御名を汚すことをするのであれば容赦はしないぞ！と、次には剣を振りかざしかねないほどの真剣さをもって相手に関わりました。私たちの内にそのような主の真理への熱心、何よりもまず主に対して忠実であることへの熱心はあるのでしょうか。これが主の民の一致の第一の基礎となることです。と同時に、その真理を愛をもって語ることの必要性も今日の箇所から私たちは学ばされます。エペソ書4章15節にも「愛をもって真理を語りなさい」とあります。真理は裸のまま用いると、相手を傷つけ、相手を滅ぼすだけで終わってしまう、ということもあります。真理は相手に対する愛が確かめられている中で、そういう環境の中で語られなければならない、というのが聖書の主張です。私たち人間同士の交わりには難しいことがたくさんあるでしょう。主を信じる者たちの間にも様々な行き違い、すれ違いが生じやすいでしょう。しかしそういう中でも私たちが失ってならないのは、まず私の主に対する真摯な服従の姿勢、主の御言葉に妥協せず、これに従うことを第一とする姿勢です。そしてその真理を、兄弟姉妹の交わりにおいて、互いへの愛をもって語り合うこと。互いに勧め合うこと。そのところに、主が御心とし、導いて下さる奇しい一致と平和の祝福が現わされて行きます。私たちはそこにおいて、「主が私たちの中におられる」ことを御名を心から賛美しながら体験させられつつ、また私たちをこのような祝福に導い

て下さるまことの神を世にあかしして行くように導かれるのです。